

16. 聖霊の導き

ペテロの手紙#16

<https://ichthys.com/Pet16.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

霊的成長の復習:

私たちは今、「霊的成長」という重要な主題の途中にいます。この学びは、ペテロがすべての信者に対して「神からの恵みと平安がますます豊かにされるように」([第一ペテロ 1 章 2 節](#))と願ったことに端を発しています。すでに学んだとおり、霊的成長こそがこの願いが私たちの日々の生活の中で実現される唯一の手段であり道筋です。神の恵みと愛の力を実際に経験し、心から神に目を注ぐときに満たされる喜びを味わうためには、内なる人のたえざる成長が必要です([エペソ 3 章 16 節](#))。霊的成長は、ペテロが言う「恵みと平安の増し加わり」を得るための前提条件であると同時に、その実現の手段でもあります。

私たちは、霊的成長に伴う祝福を物質的なものとして理解すべきではありません。もちろん、神が信仰者に物質的な祝福をお与えになることは確かにあります(アブラハムやヨセフを思い出せば十分でしょう)。しかしながら、新約聖書は、霊的成長には困難や苦しみが伴うことを繰り返し警告しています([第一ペテロ 4 章 12-19 節](#))。したがって、霊的成長に伴う祝福を考えると、私たちはそれを霊的な祝福として理解するのがふさわしいのです。これらの祝福は、この世の富をはるかに超える価値をもつものです([マタイ 6 章 19-21 節](#))。たとえば次のようなものです——

- キリストを自分の人生の中心に置くことによる真の喜びを知ること([ピリピ 3 章 8-11 節](#))。
- 神に与えられた使命を果たし、実を結ぶ人生を生きること([マタイ 13 章 23 節](#); [ルカ 8 章 15 節](#))。
- 人生の終わりに、神から「よくやった、忠実な僕よ」と言っただけのその日を楽しみに生きること([マタイ 25 章 21 節](#))。

霊的成長の原則: 私たちが最初に霊的成長について学び始めたとき、かなりの時間をかけて種をまく人のたとえ(マタイ 13 章、マルコ 4 章、ルカ 8 章)を取り上げました。神のことばの種から芽を出す植物は、私たち自身——すなわち私たちの信仰と霊的

いのち——を表しています。このたとえの中で、神のことばを受け入れて「根を下ろす」人、つまりイエス・キリストを信じて救いの信仰を持つようになった人には、実を結ぶ(すなわち神のご計画の中で実際に身をもって仕える)ようになる前に、成長を妨げる二つの試練の段階があります。:

① まず、根を十分に深く伸ばし、太陽の熱に耐えられるだけの水分を吸い上げなければなりません。つまり、信仰によって神のことばの真理(霊的な栄養)を十分に受け取り、しっかりと心に蓄える必要があるのです。そうして初めて、すべてのクリスチャンの人生に訪れる試練の時に耐え抜くことができるようになります。

② 次に、地上の「雑草」を乗り越えなければなりません。そうしなければ、その雑草が成長を妨げ、実を結ぶことができなくなってしまうからです。つまり、試練の時に信仰を保つだけでなく、学んだ真理を日々の生活の中で実践することが必要なのです。地上的な心配事や欲望を天にある希望のもとに従わせ、人生の重圧の中でも神が一人ひとりに与えられた働きを忍耐して果たす——これが、実を結ぶ信仰の成長です。

人生の試練に打ち勝つためには、聖書の真理を信仰によって心に蓄えることが欠かせません。つまり、御言葉の原則をしっかりと心に刻み、必要な時にすぐに取り出せる「霊的な弾薬」を持っていることが重要です。しかし、絶えず吹きつける人生の嵐を乗り越えるためには、単に「非常時に備えた原則の備蓄」だけでは十分ではありません。それ以上に必要なのは——人生そのものへの新しい姿勢、全く新しい考え方の方向転換です。この新しい生き方の指針を、ここでは「徳の思考(virtue thinking)」と呼ぶことにします。

徳の思考 (Virtue Thinking) の導入: 私たちがキリスト者になるとき、私たちの内に劇的な変化が起こります([第二コリント 5 章 17 節](#))。地上に生きる限り、なお悪魔の支配する世界の中に身を置いてはいますが、私たちはすでに闇の国から神の御国へと移された者なのです([コロサイ 1 章 13 節](#))。私たちの立場(ステータス)は完全に変わりました。ですから、私たちの思考のあり方もまた変えられなければなりません。霊的成長は、この新しい「新しい人(new man)」としての立場を積極的に自覚し、「霊的な思考によって自らを新たにする」([エペソ 4 章 23 節](#); [詩篇 16 篇 8 節](#)参照。詩篇全体もこの姿勢を示しています)ことによって初めて進んでいくのです。

霊的(すなわち「徳の」)思考の成長は、「この世での聖化(sanctification in time)」の過程において、欠かすことのできない要素です(聖化の教理については『ペテロ#13』を参照)。これまでに見てきたように、「キリストにある聖化」と「永遠における聖化」は、どちらも神が私たちのためにただちに成し遂げてくださるものであり、私たち自身の努

力を必要とするものではありません。しかし、「あなたがたの父が聖であるように、あなたがたも聖でありなさい」([第一ペテロ 1 章 16 節](#))という命令を果たすためには、悪い行いを避けるだけでは不十分です。それは、神のご計画の中で積極的に前進し、霊的成熟を目指して成長していく努力を伴うものなのです。使徒パウロもこう言っています。「私は子どものときは、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして思っていました。しかし大人になったとき、子どもじみたことをやめました」([第一コリント 13 章 11 節](#))。この世で大人として成熟していくために、思考や判断の仕方が変わっていくように、信仰者となった私たちもまた、霊的成熟に至るために、思考のあり方を変えていかなければならないのです。

人間の本質： すべての人間は二重の本性を持っています。つまり、私たちは皆、霊と肉体から成り立っているのです([ヘブル 12 章 9 節](#))。

主なる神は土のちりて人(すなわち、アダムの体)を造り、命の息(すなわち、アダムの霊)をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。(創世記 2 章 7 節)

最初の人アダムは、神が地のちりから造られた物質的な部分(体)と、「命の息」と呼ばれる非物質的な部分(霊)を持っていました。神がこの霊を彼の体の中に吹き込まれた結果、アダムは生きる存在となったのです。新改訳聖書などで「生きる者」と訳されている言葉は、ヘブル語でネフェシュ(nephesh)といい、しばしば「魂」と訳されます。これに対応するギリシヤ語はプシュケー(ψυχή / psyche)です。神の創造のわざによって、最初の間人は完全な、全き生きた存在となりました。アダムと同じように、私たちも今も将来も(復活を経ても)体と霊をもって存在します。しかし、この朽ちる肉体にある間、私たちの思いは自然と、この悪に満ちた世の価値観に引き寄せられやすく([ローマ 7 章 18 節](#))、霊的な側面よりも肉体的な傾向に従いやすいのです。

心： 人間の思考は、聖書でしばしば「心(heart)」と呼ばれるものの働きによって生み出されます。ここでいう「心」とは、思考・感情などを含む人間の内的存在全体を指します。聖書的な心理学の体系によれば、心は肉体と霊が交わる場所であり、私たちの本来的な霊的部分とは明確に区別される領域です([第一コリント 2 章 12 節](#), [14 章 14 節](#)参照)。すべてはこの「心」から始まります。[箴言 23 章 7 節](#)には「人はその心の思いのとおりの人である」とあります。聖書の観点から見ると、心こそが「私たち自身」なのです。この「心」の中で、私たちは最も重要な霊的戦いを戦います。心は、神をあがめ、礼拝する場所であると同時に、「悪い思い、殺人、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、中傷が出てくる」([マタイ 15 章 18-19 節](#))場所でもあります。

ですから、救われる前に私たちの心を支配していた「自然のままの思考 (natural thinking)」は、罪の性質 (sin nature) から生じる欲望、願望、恐れ、その他の感情によって強く影響されていました ([第一コリント 2 章 14 節](#))。しかし今、私たちは信仰によってキリストに属する者となり、もはや「肉的 (fleshly)」ではなく、「霊的 (spiritual)」な存在となりました ([第一コリント 2 章 15 節](#))。それでも、信者である今もなお、救われる以前に私たちを惑わせたこの世的思考の強い影響から自動的に免れるわけではありません。ですから、救われる前の古い生き方の束縛から解放され、神のために積極的に成長し、仕える生き方へと変えられるためには、私たちの思考そのものが変えられる必要があるのです：

あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ (神の目に) 全きことであるかを、わきまえ知るべきである。(ローマ 12 章 2 節)

ここで語られている人生の変革とは、外面的な変化ではなく、霊的な変化のことです。つまり、古い生き方から離れ、新しい霊的な生き方へと成長していくことを意味しています。この変化は、私たちの中の霊的な側面を重んじる新しい思考のあり方 (徳に満ちた思考) によってのみ実現されます。これは、私たちの周囲を取り巻く肉的で世俗的な思考のパターンとは、はっきりと対照的なものです。したがって、私たちはこれまでとは異なる考え方をしなければならないのです。しかし、「違う考え方をする」とは、具体的にどういうことなのでしょう？

思いを新しくすること： 信じる者とされた私たちは、神が与えてくださった「思いを変える」ための手段を、すでに備えています。神はこの大切な働きのために、次のような助けを与えてくださいました。

- 聖霊 — 聖霊は、私たちの成長を養う霊的な真理を理解できるよう助け、またあらゆるクリスチャンとしての行動を力づけてくださいます ([第一コリント 2 章 10-16 節](#) ; [12 章 3 節](#))。
- 祈り — 私たちは祈りによって神の御前に進み出て、助けと知恵を求め、また神との交わりを持つことができます ([エペソ 2 章 18 節](#))。
- 教師と牧者 — 神は、真理の原則を理解し、記憶することを助けるために教師や牧者を与えてくださいました ([エペソ 4 章 11-16 節](#); [第二ペテロ 1 章 13 節](#))。

- 聖書 — 聖書、すなわち神のことばが、日々の黙想と教えの源として与えられています([詩篇 1 篇 1-3 節](#))。

常に徳の思いを持つこと： 信仰者として効果的に生き、共通の目標である霊的成長を達成するためには、私たちは「神と過ごす時間」だけでなく、いつも霊的であることが求められます。つまり、起きているすべての時間において、霊的に考え、正しい霊的な判断と適用を行う必要があるのです。私たちは、イエス・キリストを信じることによって永遠に「聖なる者」とされましたが、日々の生活の中でも同じように聖くあるように召されています。このことを実際に生きるのは決して容易ではありません。そして、これまで見てきたように([ペテロ#15](#) 参照)、罪を避けたり、罪を犯したときに告白して立ち直ることだけでは、この課題を十分に果たすことはできません。たとえ完全に罪を避けることができたとしても、神は私たちにそれ以上のことを求めておられるのです。

旧約聖書のユダヤ人に対して、主は「聖なる民」として生きるためのきわめて詳細な指示を与えられました。それがモーセの律法です。律法には、さまざまな項目の中に、非常に厳密な食事の規定なども含まれていました。これらの多くは、直接的に霊的なことと関係しているわけではありませんでしたが、イスラエルが周囲の異教の民とは異なる「特別な民」であることを示すためのものでした([レビ 20 章 24-26 節](#))。しかし、使徒パウロの明確な教えからわかるように、律法を完全に守ることは不可能です。そして、律法のより深い意味は、福音のための手段にあります。つまり、律法は人に、自分の努力によって完全に正しく生きることができないという現実をはっきりと示すものなのです。ですから、「律法によって罪の自覚が生じる」([ローマ 3 章 19-20 節](#))のです。

キリストを信じ、聖霊という偉大な賜物にあずかる者として、私たちに求められていることは、単に「律法を守る」という不可能な基準よりも、はるかに大きなものです。確かに、律法に記されている多くの禁令の中には、今もなおキリスト者に当てはまるものもあります。しかし、私たちはもはや律法の細かな規定に縛られて生きるのではなく、恵みのもとに生かされているのです([ローマ 6 章 14-15 節](#))。そして、さらに高い基準である「キリストの律法」——すなわち「愛の律法」——のもとに置かれています([マタイ 22 章 37-40 節](#); [第一コリント 9 章 21 節](#); [ガラテヤ 5 章 22-23 節](#), [6 章 2 節](#); [ヤコブ 2 章 8 節](#))。この自由は、罪にふけるための自由ではなく、義に至る従順のために与えられた自由です([ローマ 6 章 16-18 節](#))。ですから、神がくださったこの自由のうちにしっかりと立ち、私たちの罪深さを映し出すだけの律法のくびきに、再び縛られてはなりません([ガラテヤ 5 章 1 節](#))。

実際的に言えば、キリスト者として神が与えてくださった賜物を用いて成長し、神に仕えるという召しを果たすためには、聖書の教えの「してはいけないこと」だけに注目して生きるのではなく、「すべきこと」、すなわち積極的な実践を最優先にしなければなりません。私たちは、毎日のあらゆる瞬間において、神の真理を正しく適用し、キリスト者としてふさわしい行動をとり、主が望まれることを行うよう求められているのです。もちろん、私たちが生きる中で直面する状況は数え切れないほど多様であり、それぞれの細部にわたって取り扱うことのできる書物など存在しません。だからこそ、否定的な戒めのリストだけでは十分ではないのです。霊的成熟とは、まさにこの「思いの一新」([ローマ 12 章 2 節](#))を意味します。聖書には、避けるべき事柄と同じように、積極的に守るべき確かな原則も多く示されています。たとえば――：

- 働いて生活の糧を得なければなりません ([第二テサロニケ 3 章 10 節](#))
- 家族を養う責任があります ([第一テモテ 5 章 8 節](#))
- 良き市民として社会に対して責任を果たさなければなりません ([ローマ 13 章 1-8 節](#))

それでもなお、日々の生活の中でキリストの真理を実践するうえで大切なのは、ほとんどの場合「柔軟さ」です。ここで言う柔軟さとは、真理の原則を妥協することではありません。そうではなく、神が私たちに日常生活の中でキリスト者として歩むために備えてくださった、もう一つの重要な真理の領域――すなわち「キリスト教的徳 (Christian virtues)」を正しく理解し、用いることを意味しています。

もし私たちの思考のパターンを、神が受け入れるように教えておられる「徳 (virtues)」に従って組み立て直すなら、私たちは本当に「思いを新たにすることで変えられる」([ローマ 12 章 2 節](#))者となり、「霊の思いによって新しくされる」([エペソ 4 章 23 節](#))道歩むこととなります。パウロがガラテヤ人への手紙第 5 章で教えているのはまさにそのことです。すなわち、古い生き方に結びついた思考のパターンを退け、新しい、キリストにある思考――すなわち聖霊によって支えられ、導かれる思考――を身につけることです：

兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい。(ガラテヤ書 5 章 13 節)

私たちクリスチャンの立場は、「神の自由な民」としてのものです。しかし、この自由は、好き勝手にふるまうための免許証ではありません。良いことであれ悪いことであれ、

自分の思うままに行動することが許されているわけではないのです。この自由には責任が伴います——罪を避ける責任だけでなく、信仰の歩みの中で他のクリスチャンを助ける責任もあります。パウロは、最も重要なクリスチャンの徳である「愛」を用いて、このことを説明しています。すなわち、クリスチャンは否定的な考え方ではなく、積極的に前向きな思考（「徳に基づく思考」）を重んじるべきだということです。神が私たちを愛し、御子イエスを私たちのために死に渡されたように、また主イエスが今も私たちを愛しておられるように、私たちもその愛を見習い、反映させなければなりません。そして、この地上での人生を、自分を喜ばせるためではなく、他のクリスチャンを助けるための機会として用いるべきなのです：

律法の全体は、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」というこの一句に尽きるからである。（ガラテヤ 5 章 14 節）

パウロは、私たちがこれから取り上げるように、まず最も基本的なクリスチャンの徳である「愛」から始めています。この「愛」という一つの積極的な徳を、もし完全に、正しく実践することができるなら、それだけで律法の目的全体を成就することになります。愛というものを、その驚くほど多様で深い意味合いすべてにおいて真に理解し、常にその愛に基づいて考えることができるなら、聖書に教えられている他のすべての徳は、自然に、無理なく整っていくことでしょう。もし私たちが自分自身の状況よりも、他の人々の救いと霊的成長を心から大切に思い、その思いに従って行動するならば、まさに愛において律法を全うしていることになるのです。

「徳の思考 (Virtue thinking)」とは、この「愛」の原則を、聖書に教えられている他のすべての徳にも適用することです。ある意味で、他の徳はすべて、愛のさまざまな側面であり、より具体的な状況に対応するために形を変えたものなのです。これらの徳を正しく理解し、実際に適用することができれば、それらは私たちの思考の焦点となり、人生で直面するさまざまな出来事に前向きに取り組む助けとなります。そして、それらの徳が私たちの心の中でますます大きな位置を占めるようになるにつれて、私たちは自然と神に喜ばれる方向へと導かれていくのです。一般的に言えば、もし私たちがいつも正しいことをしているなら、間違ったことをしてしまう心配をする必要はありません。

正しいことを行うためには、まず正しい態度、正しい見方、そして正しい考え方を持たなければなりません。私たちは、徳を完全に理解し、心から受け入れ、常にそれを心の中心に据える必要があります。「徳の思考 (virtue thinking)」とは、「自分を愛するように隣人を愛しなさい」という戒めを実現するための手段です。確かに「愛」という言葉には非常に広い意味があり、実際のところ、愛がすべてを包含しています。しかし、この

複雑な世の中でキリスト教の教えを具体的に実践するためには、もう少し掘り下げて考える必要があります。そこで、聖書の中で語られているいくつかの具体的な徳、そしてそれらを正しく実践するための方法について、これから詳しく学んでいくことにしましょう。

気をつけるがよい。もし互にかみ合い、食い合っているなら、あなたがたは互に滅ぼされてしまうだろう。わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。(ガラテヤ 5 章 15-16 節)

ガラテヤの人々は、どうやら仲間のクリスチャンたちに対して、分裂的で競争的、さらには敵対的な態度を取るようになっていたようです。互いに助け合う代わりに、むしろ「自分さえ良ければ」という利己的な姿勢で行動していました。パウロは、そのような態度の行き着く先は自己破壊であることを指摘します。そして、そこから彼は、正しいキリスト者の生き方について説明を始めます。もし私たちが自分の考え方を聖霊の思いに合わせ、すでに受け入れた御言葉を通して聖霊の内なる導きに従うなら、私たちはもはや罪深い性質やこの世的な欲望に従って生きることはなくなるのです。

聖霊は、私たちが望むなら、正しいことを考え、正しいことを行うように助けてくれます。大切なのは、私たち自身がその導きに「参加する」意志を持つことです。もし私たちが善を追い求めるなら、当然のことながら悪を避けることとなります。私たちがキリスト者として正しい歩みを続けるための「車線の標識」となるのは、信仰・希望・愛といった徳(virtues)です。これらや他の徳についてよく理解し、思いをその良い方向へ向けることを学ばなければなりません。そうして私たちが善を思い、行おうとするとき、聖霊はその過程の中で私たちを助け、また善い思いから生まれる善い行いを実現する力も与えてくれます：

なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(ガラテヤ 5 章 17 節)

私たちの現在の肉体的な性質(本性)には、罪へと傾く性向があります。けれども、クリスチャンである私たちは、助け主である聖霊をいただいています([ヨハネ 14 章 16 節](#), [16 章 7 節](#))。聖霊は、私たちの内にある罪深い欲望に立ち向かい、私たちが神に従うよう助けてくれます。しかし、どちらの道を選ぶかという決定は、最終的に私たち自身に委ねられています。私たちは自分の意志で行動しているように感じますが、

実際には、どんな状況であっても「御霊に従うか」「肉に従うか」のどちらかの指導者についていくこととなります。クリスチャンとして直面する実際的な問題は、この二つの間の戦いが、言葉ではなく目にも見えない「心」という戦場で繰り広げられるということです。そこは、霊と肉が交わる場所であり、私たちの思いと意志が毎日、神に従うか、それとも罪に屈するかという選択を迫られる場所なのです。

良い意図だけでは、この二つの力——すなわち、肉の働きと御霊の導き——を見分けることはできません。聖霊は、私たちの心に蓄えられた真理と共に働かれます。私たちが聖書についてより深く理解し、それを信じれば信じるほど、聖霊の働きはより効果的になります。特に、キリスト教の徳(virtues)についての理解が正確で、それらに心を集中させるほど、私たちは肉の力が生活や行動を支配しようとするのに対して、より強く抵抗できるようになります。こうして、私たちは御霊の導きにますます敏感に、そして素直に応答できる者となっていくのです：

もしあなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。(ガラテヤ書 5章 18 節)

ひとたび、御霊によって導かれる良い思考と行動のパターンを知り、信じ、実践する習慣を身につけるならば、もはや律法による制約は私たちに適用されません。というのも、律法は聖なるものであり、神から与えられたものだからです。したがって、自己中心ではなく、愛に満ち、純粋な行いは、律法に反することは決してありません。このように、徳の思考(virtue thinking)を通して聖霊の思いに自分を合わせていけば、私たちはもはや肉の思いに従って歩むことはなくなるのです：

肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言う。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。(ガラテヤ書 5章 19-21 節)

興味深いことに、ここでパウロが挙げている罪の多くは、実際の行動というよりも「心の態度」に関わるものです(これらを、徳の思考＝聖い態度と対比してみてください)。さらに重要なのは、このリストが意図的に「不完全」であるという点です。パウロは「そのような類のものも」([ガラテヤ 5章 21 節](#))と付け加えることで、たとえ自分の弱点がここに具体的に挙げられていなくても、あらゆる罪、すべての神への不従順は、「肉に従うこと」から生じるのであり、聖霊の助けを活かしていないことから来るのだとはっきり教えています。

引用文の最後の一文にも注目する必要があります。「罪を習慣とする者たちは神の国を受け継ぐことがない」とパウロは言っています。すでに学んだように、私たちの中に罪のない完全な者はいませんし、そのような完全さは達成不可能です。ここで言われているのは、聖書の真理——「罪の報酬は死である」([ローマ 6 章 23 節](#))ということです。すなわち、罪に身をゆだねて生きる者は、やがて神から離れ、イエス・キリストへの忠誠を裏切ることになるのです([ローマ 11 章 22 節](#))。しかし、私たちが心の中にある真理に働きかける聖霊に従い続けるなら、この罠を避けることができるのです。

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。(ガラテヤ書 5 章 22-23 節)

これらの節には、聖書に多く見られる美德(virtues)の一覧の一つが含まれています。このリストは完全なものとして提示されているわけではなく、むしろその文脈に応じて、先に述べられた悪徳や不適切な行動と対比させることを目的としています。これら二つの描写を通して、パウロは肉的な行動と霊的な行動の対照的な姿を、誰の目にも明らかかな形で示しています。これらを読むと、一方では卑しさが、他方では霊性が、それぞれ一体となって浮かび上がってくるように感じられます。このような見方は意図されたものです。なぜなら、上に挙げられたすべての悪徳と美德は、私たちの生を動かし支配する二つの相反する「力の源」——すなわち、善をもたらす聖霊と、悪をもたらす罪の性質——のどちらかから流れ出るものだからです。

美德的思考(virtue thinking)は、一般的な原則から始まり、次第に具体的な事柄へと進んでいきます。罪を犯すために特別な努力をする必要はありません。それは、いわば「自然に」出てくるものです。しかし、キリスト者としてふさわしく生きるためには、それ以上のものが求められます。信者である私たちは、内に宿る聖霊の働きによって「キリストの思い」([第一コリント 2 章 15-16 節](#))を持っています。けれども、聖霊の導きは、私たちの心の意志だけでなく、神の真理に対する理解にも依存しています。キリスト教の美德の原則に関する理解(すなわち、知識と信仰の結合)は、聖霊が私たちの霊的成長をもたらすために用いる霊的資本なのです。この真理の理解、特にここでいう美德の原則の理解こそが、いわば「倍力装置」となって、私たちが悪魔の世を歩む中で行う善い努力を大きく増幅させるのです。

上の箇所から放たれるまばゆい善の光は、その中に含まれる具体的な指針の観点からも考える必要があります。そうすることで、これらを正しく理解し、私たちの思考の中で繰り返し思い巡らすことができるようになるのです：

キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか。(ガラテヤ書 5 章 24-25 節)

イエス・キリストを信じたことによって、私たちは自分の人生における罪の支配を退け、代わりにキリストの支配を受け入れました。聖霊によって、私たちはキリストのうちにバプテスマを受け、キリストと一つの体とされ、今この地上で助け主として共にいてくださるのが、その聖霊です。私たちに新しいいのちを与えてくださった同じ聖霊が、今も霊的成長と前進の道を導いてくださっています。霊的に成長し、人生の悩みや心配事を乗り越え、サタンの支配する世の中で神のために実を結ぶためには、まず私たちの心(思い)の中での戦いから始まる、積極的な生き方が必要です。聖霊の力を受け、神のことばの真理によって絶えず養われ、心を新たにされるとき、この生き方——すなわち「美徳的思考(virtue thinking)」——を、次回さらに詳しく学んでいくことにしましょう。